

第2回 淀川河口 矢倉緑地 探鳥会 2024年4月21日(日) 担当: 納家 仁、西村 浩、上村 賢、あおぞら財団
9時30分 阪神電鉄「福」駅 集合 12時30分 現地 矢倉緑地内で解散

淀川河口は、榎本佳樹が、大正から昭和初期にもっとよく通った場所です。当時とは大きく環境は変わっていますが、榎本の愛したシギやチドリなど春の渡り鳥の姿を探してみましょう。

・淀川河口部に就て 「鳥」5(25)1928年(昭和3年)榎本佳樹

淀川河口部と云っても随分広い区域に亘って居て、其南部は大阪港の主要部であり、中部は北港海水浴場や桜島工業地のある所で、北部は中部のすぐ北から新淀川の広潤な河口を含む地域となって居る。此北部には新淀川河口の南に干潮の際に現れる洲があり、其東内方に稍広い沼地の萱原があって、更らに其東内方に砂質の畑地がある。それから新淀川の両岸堤防の外側も萱原や草地になって居る。是等の場所は大阪市の一部で、現今拡張されつつある市街地の人家が東方数丁の所まで迫って来て居るから、遠からぬ内に、住宅や商店、或は工場などが建ち並んで仕舞ふことであらう。

右の砂洲と萱原とが shore birds や marsh birds のしばしば来たり、又或る種類の繁殖する場所で、此位の所は全国到る處に幾つもあり、且つ又理想的な鳥類繁殖場や集合地でもないが、雑踏喧噪極まる大商工業都市の附近としては、鳥類観察のため比較的価値のある所であるのと、現今は海水浴、魚釣、貝拾ひ等のためここへ沢山の人が来て、大阪市民の遊び場所の一つとなって居る点もあるから、将来も成るべく現状のまま保存してほしいものである。

自分が今迄にここで観察し得た鳥類は カイツブリ、ウミウ、アオサギ、ササゴイ、ゴイサギ、※ヨシゴイ、コガモ、カルガモ、トビ、ノスリ、ミサゴ、*ヒメクイナ、*バン、*コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、ハマシギ、ツルシギ(アカアシシギ?)、アオアシシギ、クサシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、アジサシ、エリグロアジサシ、カモメ、カワセミ、*ヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、コサメビタキ、ツグミ、ジョウビタキ、ウグイス、*オオヨシキリ、*セッカ、ツバメ、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、*コカワラヒワ、スズメ、ホオジロ、オオジュリン等五十二種あって、中で八種はこの地で繁殖するもの(*あるもの)であるが、尚将来これ等五十余種の他に新しく見聞される種類が多少あることと思はれる。

和歌山県では南部の方がまだ交通の便がよくないため行って見ないから、良好な観察地があるかないかわからず、北部の方は鉄道の通じている区域内に shore birds や marsh birds の観察場所として適当な所がない。それで自分は比較的交通の便利な此淀川河口部へしばしば行くことにして居る。(終)

附記 — 榎本氏の淀川河口に於けるシギ・チドリ類の御観察は甚だ有益である。此の如く日本国中の河口の之等の鳥類の渡来に就き地方在住者の御観察を希望する。右の目録中エリグロアジサシとあるのはコアジサシ非生殖羽又は幼期にては非ざるや(黒田)。

・「大阪市附近の渡り鳥」榎本佳樹 「野鳥」1巻6号 1934年(昭和9年)6月

【当時の大阪湾岸の状況】

- ・淀川河岸其他に葦原があり、畑地、水田、草地等も尚少々残っているので、それ等に住む数種鳥類は多少見られ・・・
- ・大阪湾沿岸の砂濱は、多くの箇所は幅狭く、且つ其背後地には大小の都市町村が殆んど連続していて、淀川とその分流の河口部が昨年までの鶺鴒、千鳥類や鰍刺類の渡来に適して居た外、鳥類棲住のためには殆ど価値のない所ばかりである。
- ・河川は淀川以外のものは短小で水量少なく、河口部に広い砂洲や泥濱の発達したのものもなければ、沿岸に葦原や湿地等がなくて、鴨類や鶺鴒・秧雞類などの渡来に適したものもない。
- ・只淀川は水量豊富で分流も頗る多く、それ等は殆ど全部運輸交通産業等のために利用されているが、それでも昨年までは泥濘地、葦原、砂洲等の中、諸種鳥類の渡来棲住に適した部分が僅少なながら残って居り、又大部分の河水は、一方に於て工業其他による汚濁水を流しているが、他方に於ては大住民地を貫流している関係上、食餌となる物質が饒多なためか、河口部附近の水土には、種々の小動物が多く、従って人口稠密極まる大都会で人も頗る多いにかかはらず、渡り鳥は割合に澤山来たのである。然るに是等の場所も市街地や港湾の拡張工事のため本年から鳥類の棲住に適しない様になろうとしている。

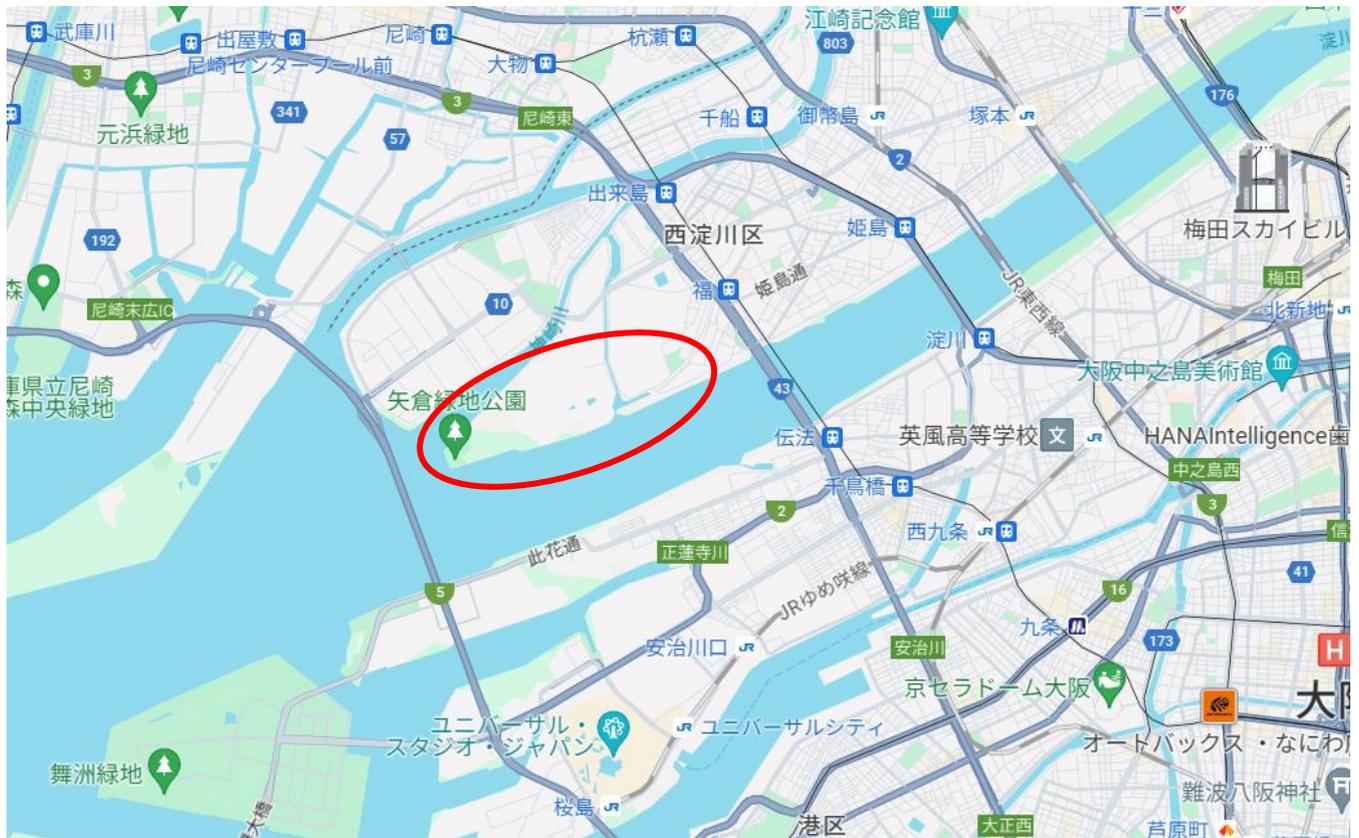
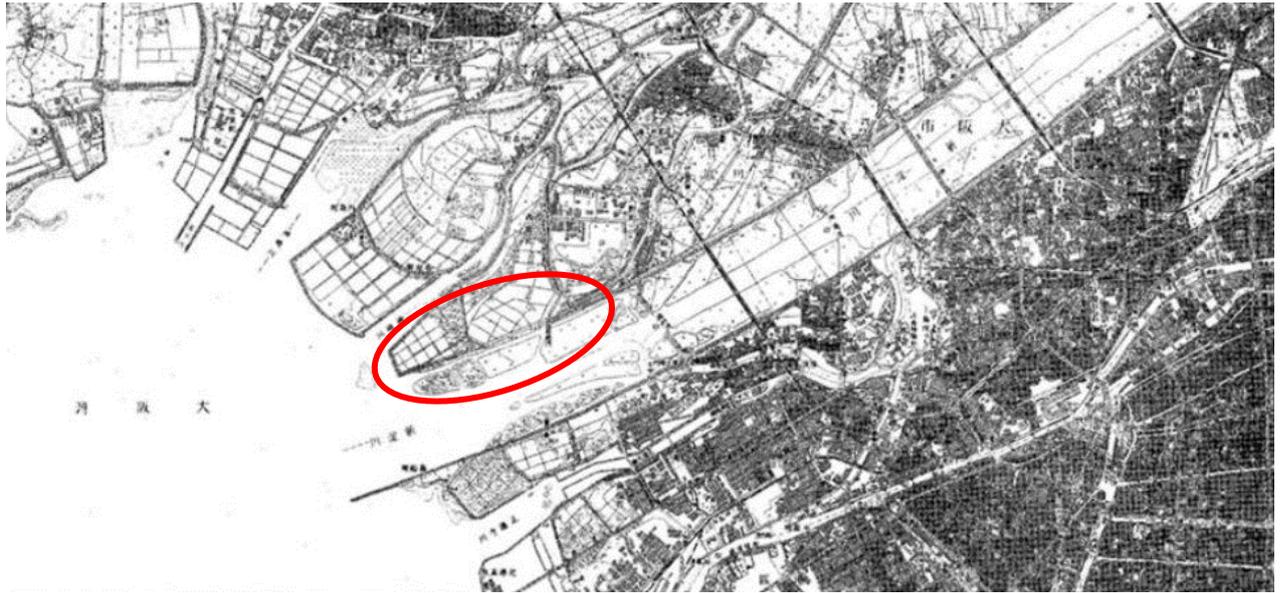
大阪支部誕生のころ 第2代支部長 藤原廣蔵 記

シギ、チドリは交通と足場などの関係止、大勢の探鳥会には淀川河口へ行くことが多かった。あの辺の地盤沈下の起る前で、干潮時には岸に干潟が出来たり中州が現れたりして、堤防上から楽に観察することが出来た。又、満潮時には堤防の外側に鳥の集る湿地があって、干潮時に堤防上で充分観察して潮が満ちかけると堤防を下りて、その湿地で弁当食いながら待っていると、シギやチドリが続々と集まってくると云う具合で、今のような芥だらけの干潟でなく環境も比較的きれいであった。

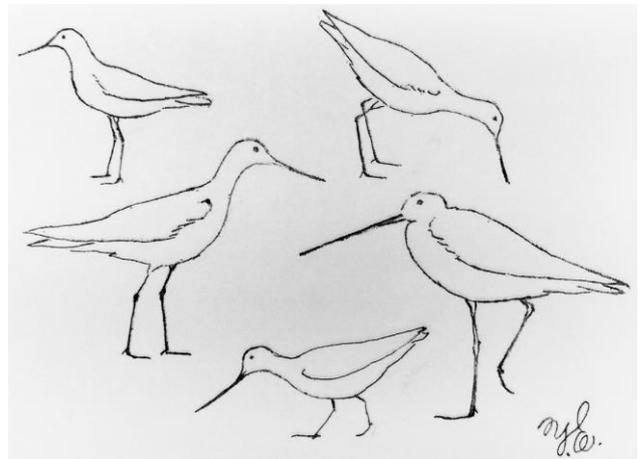
大阪支部春季鶺鴒千鳥探鳥会 堀田光鴻 「野鳥」1941(昭和16年)7号

大阪支部で恒例の探鳥会を五月十一日の日曜開催。参加者は神戸支部から小林桂助、桑田鐵也の両氏。大阪支部としては榎本佳樹、丸山廉、藤原廣蔵の三氏と堀田。合計六名である。鶺鴒千鳥は一般の方には餘り興味が無いと見え、回を経る毎に参加者は減少するが、結局はこの六人位が残るらしい。観察した鳥は例年と餘り変わらないが、オグロシギやメダイチドリの美しい夏羽、京女シギの群飛。コチドリやシロチドリの営巣も少々見られた。

1932年（昭和7年）の地形図
今から90年前の大阪



「大阪市付近の渡り鳥」
「野鳥」昭和9年（1934）6月号から
ツルシギ400羽以上、キアシシギ300羽以上、
オオソリハシシギ、キョウジョシギ、ムナグロ200羽
以上など。いずれも1ヶ所での観察記録



新淀川河口付近（昭和十四年五月二十二日）中西悟堂「定本 野鳥記」第7巻 平野と島の鳥 から抜粋

大阪府新淀川と神崎川の両河口にはさまれた一郭の低湿地をめざして、榎本佳樹翁と森田淳一博士と私の三人は、満潮の新淀川右岸を右に切れる。頭上を二羽のキアシシギが、ピューイ、ピウイと鳴いて過ぎる。

「チュウジャクじゃ」古武士のような榎本翁の足がびたりととまる。双眼鏡が眼にあてられる。

「あしこにおる」と翁は三百メートルばかりへだたった低地を指さす。若いころには片腕で器械体操の鉄棒にぶら下がって、ぐいとの上上がったという榎本氏のおもかげが老いてなおかくしゃくとした今の姿にも宿っている。世俗にたいしては嫌厭か無頓着しか示さないひとみが、ひとたび野生の鳥に遭遇すると、らんらんとしてかがやき出す。信頼のできる一瞥である。なるほど三十、四十の黒いかたまりが、あたりの地色との区別もむずかしくうずくまっている。

「なるほど」とわれわれはうなずく。とたんにチュウシヤクシギの一群は、もうそんな距離からわれわれの接近を警戒してか、一度に舞い立って、音もなく遠のいてゆく。

ピューイウ…………ピューイウ…………。

ピューと長く引いて、イだけをしゃくり上げるものがなしいダイゼンの声々が、遠くで交差する。山の鳥たちの、森や藪からほとぼしり出る喜ばしげな声とちがって、地平線にかき消えるような、あるいはただ水だけが聴くことのできるような、鶺鴒・千鳥類の憂愁な声々のうちでも、とりわけてダイゼンの尺の長いしめっぽい声には、みじんの平俗さも、ころがり出るような調子もない。鷺・鷹類の、あの虚空にのみ属するような声から、訴える調子だけをとり上げ、さらに水っぽさと優雅さを加えて、きれぎれに絶えてはつづくその声は、私にいっさい世事を捨て去って、ただこの声、というよりもその声の属する世界にしたがえ、と示唆を与えるようである。

朝日照る潟はひらけて鶺鴒千鳥むくむきに餌をあさりむらがる

へうべうとおこる声あり聴き入れば絶ゆるすなはち次ぎてはおこる

舞ひ立ちて千鳥みだるる空のなかひびかふこえのいたく哀しも



大淀の秋 淀川河口の風景 堀田光鴻氏の絵

野鳥チェックリスト

淀川河口 矢倉緑地	2023年度			2024年	よどがわかこう やぐらりよくち	2023年度			2024年			
	4	8	2	4月		4	8	2	4月			
	16	26	23	21日		16	26	23	21日			
	天候					てんこう						
みつけた鳥・きいた鳥	晴れ	晴れ	雨	姿	声	みつけたとり・きいたとり	はれ	はれ	あめ	すがた	こえ	
	確認			姿	声		かくにん			すがた	こえ	
26	オカヨシガモ	○		○		286	ユリカモメ					
28	ヒドリガモ	○		○		293	ウミネコ					
30	マガモ					294	カモメ					
32	カルガモ	○		○		299	セグロカモメ			○		
35	オナガガモ			○		301	オオセグロカモメ					
38	コガモ			○		339	ミサゴ	○	○	○		
42	ホシハジロ	○		○		342	トビ		○	○		
46	キンクロハジロ	○		○		356	オオタカ					
47	スズガモ	○		○		355	ハイタカ					
59	カワアイサ					383	カワセミ		○	○		
60	ウミアイサ					390	コゲラ		○			
62	カイツブリ			○		401	チョウゲンボウ	○				
64	カンムリカイツブリ		○	○		407	ハヤブサ					
66	ハジロカイツブリ					420	モズ			○		
74	キジバト	○	○	○		435	ハシボソガラス	○	○	○		
78	アオバト			○		436	ハシブトガラス	○	○	○		
127	カワウ	○	○	○		445	シジュウカラ	○	○	○		
141	ササゴイ		○			457	ツバメ	○	○	○		
144	アオサギ		○	○		452	ヒバリ					
146	ダイサギ		○			463	ヒヨドリ	○	○	○		
148	コサギ		○			464	ウグイス	○		○		
174	バン					485	メジロ			○		
175	オオバン	○		○		480	センダイムシクイ		○			
195	ケリ					499	セッカ	○				
197	ムナグロ					506	ムクドリ	○	○	○		
199	ダイゼン					525	ツグミ	○		○		
203	コチドリ					540	ジョウビタキ			○		
204	シロチドリ					549	イソヒヨドリ		○	○		
205	メダイチドリ					569	スズメ	○	○	○		
225	オオソリハシシギ					574	ハクセキレイ	○	○	○		
227	チュウシャクシギ					587	カワラヒワ	○		○		
230	ダイシャクシギ					610	ホオジロ					
231	ハウロクシギ											
235	アオアシシギ											
241	キアシシギ		○									
243	ソリハシシギ											
244	イソシギ	○	○	○								
246	キョウジョシギ											
247	オバシギ					※	カワラバト(ドバト)	○	○	○		
249	ミュビシギ											
251	トウネン											
253	オジロトウネン											
261	ハマシギ											
						合	計	25	24	36		